【目　次】

研究発表（１）レジュメ（宮崎直美氏）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２頁
研究発表（２）レジュメ（横山陸氏）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３頁
第 10 回学会、研究発表の要約とコメント（島崎隆氏）・・・・・・・・・・・・・・・・・４頁
第 10 回学会、研究発表のまとめ（鈴木宗徳氏）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６頁
一橋大学哲学・社会思想学会第６回総会議案書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８頁

研究発表（１）

P. ティリッヒの起源思想 —E. ヒルシュとの論争をめぐって

宮崎　直美（一橋大学大学院社会学研究科博士課程）

パウル・ティリッヒ Paul Tillich(1886-1965)は、カール・バルト Karl Barth(1886-1968)や、ラインホールド・ニーバーReinhold Niebuhr(1892-1971)と並ぶ、20 世紀の代表的な神学者である。ティリッヒは、特に第二次世界大戦後にアメリカで執筆した大著『組織神学』で知られているが、1933 年にアメリカへ亡命する前に宗教社会主義思想を構築していた。ティリッヒの宗教社会主義思想は、ワイマール共和国期のドイツにおいて、大量の失業者が社会問題となっていたにもかかわらず、神学的には個人の救済のみを重視したために社会変革には無関心であったルター派と、科学的であることや合理性を重視していたために、後にナチズムに取り込まれていくような中間階層の思想的基盤たることができなかった社会主義思想の双方を批判しつつ、両者の統合を試みたものである。

ティリッヒは、この 1920 年代に構築した宗教社会主義思想を基盤とし、ナチス台頭の足音を聞きながら、『社会主義的決断 Die sozialistische Entscheidung』(以下『決断』と略記する)を執筆した。『決断』は、1931 年 10 月に Hochschule für Politik でティリッヒが行った講演がもととなっており、さらには 1930 年から 33 年まで刊行され、ティリッヒが編集に携わっていた雑誌 Neue Blätter für den Sozialismus を知的土壌としたものである。『決断』において、ティリッヒは 1920 年代に用いていなかった概念、たとえば「起源 Ursprung」、「政治的ロマン主義 die politische Romantik」などを新たに用いて論じている。

本発表では、まず『決断』におけるティリッヒの「起源」の思想に焦点を当て、ティリッヒの目指す社会主義と政治的ロマン主義の相違を明らかにする。特に政治的ロマン主義の革命的形態は間もなくナチスに投票する人々のことを念頭に置いた概念であるということを鑑みると、両者の相違を論じることは重要である。なぜなら、彼は、政治的ロマン主義も社会主義も起源との関係で論じており、一見すると両者は近いところにあるからである。

②次に、ティリッヒの「起源」思想をより明らかにする為に、1934-35 年に起きた E.ヒルシュとの公開書簡における論争を取り上げる。キルケゴール著作集のドイツ語訳で有名なヒルシュは、ナチスを支持したいわゆるドイツ的キリスト者としても知られている。両者の論争は、1934 年にヒルシュが出版した『哲学的・神学的考察から見た今日の精神状況 Die gegenwärtige geistige Lage im Spiegel philosophischer und theologischer Besinnung』に対して、ティリッヒが『神学雑誌 Theologische Blätter』に公開書簡を発表

したところに端を発する。本発表では、書簡におけるティリッヒ、ヒルシュの両者の主張を、特に Volk 概念を中心にして取り上げる。

以上より、まだナチズムが海のものとも山のものともつかない状況の中で語られた「起源」について論じる。